

庭の追憶

寺田寅彦

青空文庫

郷里の家を貸してあるT氏からはがきが来た。平生あまり文通をしていないこの人から珍しい書信なので、どんな用かと思つて読んでみると、

郷里の画家の藤田^{ふじた}という人が、筆者の旧宅すなわち現在T氏の住んでいる屋敷の庭の紅葉を写生した油絵が他の一点とともに目下上野^{うえの}で開催中の国展に出品されているはずだから、暇があつたら一度見に行つたらどうか。

という親切な知らせであつた。さつそく出かけて行つて見たら、たいして搜すまでもなくすぐに第二室でその絵に出くわした。これだとわかつた時にはちょっと不思議な気がした。それはたとえ

ば何十年も会わなかつた少年時代の友だちにでも引き合わされる
ようなものであつた。

「秋庭」という題で相当な大幅たいふくである。ほとんど一面に朱と黄
の色彩が横溢おういつして見るもまぶしいくらいなので、一見しただけ
ではすぐにつれが自分の昔なじみの庭だということがのみ込めな
かつた。しかし、少し見ているうちに、まず一番に目についたの
は、画面の中央の下方にある一枚の長方形の飛び石であつた。

この石は、もどどこかの石橋に使つてあつたものを父が掘り出
して来て、そうして、この位置にすえたものである。それは自分
が物ごころついてから後のことであつた。この石の中ほどにたし
か少しくぼんだところがあつて、それによく雨水や打ち水がたま

つて空の光を照り返していたような記憶がある。しかし、ことに
よるとそれは、この石の隣にある片麻岩へんまがんの飛び石だつたかもしれない。それほどにもう自分の記憶がうすれているのはわびしいことである。

この絵でも、この長方形の飛び石の上に盆栽が一つと水盤が一つと並べておいてあるのがすっかり昔のままであるような気がするが、しかしこの盆栽も水盤も昔のものがそのまま残っているはずはない。それだのに不思議な錯覚でそれが二十年も昔と寸分ちがわないような気がするのである。

この飛び石のすぐわきに、もとは細長い楠くすの木が一本あつた。それはどこかの山から取つて来た熊笹くまざさだか藪柑子やぶこうじだかといつ

しょに偶然くつついで運ばれて来た小さな芽ばえがだんだんに自然に生長したものである。はじめはほんの一寸二寸であつたものが、一二寸になり、四五寸になり、後にはとうとう座敷のひさしよりも高くなってしまった。庭の平坦な部分のまん中にそれが旗ざおのように立つてているのがどうも少し唐突なように思われたが、しかし植物をまるで動物と同じように思つて愛護した父は、それを切ることはもちろん移植しようともしなかつたのであつた。しかし父の死後に家族全部が東京へ引き移り、旧宅を人に貸すようになつてからいつのまにかこの楠は切られてしまつた。それでこの「秋庭」の画面にはそれが見えないのは当然である。しかしそれが妙に物足りなくもさびしくも思われるのであつた。

次に目についたのは画面の右のはずれにある石燈籠である。

夏の夕方には、きまつて打ち水のあまりがこの石燈籠の笠に注ぎかけられた。石にさびをつけるためだという話であった。それからまた低気圧が来て風が激しくなりそうだと夜中でもかまわず父は合羽かつぱを着て下男と二人で、この石燈籠のわきにあつた数本の大きな梧桐あおぎりを細引きで縛り合わせた。それは木が揺れてこの石燈籠を倒すのを恐れたからである。この梧桐あおぎりは画面の外にあるか、それとももうどうの昔になくなっているかも知れない。

画面の左上のほうに枝の曲がりくねつた闊葉樹かつようじゅがある。この枝ぶりを見ていると古い記憶がはつきりとよみがえつて来て、それが槲かしわの木だとわかる。ちょうど今ごろ五月の節句のかしわ餅もちを

つくるのにこの葉を探つて来てそうしてきれいに洗い上げたのを
笊^{ざる}にいっぱい入れ、それを一枚一枚取つては餅を包んだことをか
なりリアルに思い出すことができる。餡^{あん}入りの餅のほかにいろい
ろの形をした素焼きの型に詰め込んだ米の粉のペーストをやはり
槲の葉にのせて、それをふかしたのの上にくちなしを溶かした黄
絵の具で染めたものである。

正面の築^{つきやま}山の頂上には自分の幼少のころは丹波栗^{たんばぐり}の大木が
あつたが、自分の生長するにつれて反比例にこの木は老衰し枯死
して行つた。この絵で見ると築山の植え込みではつづじだけ昔の
がそのまま残っているらしい。しかし絵の主題になつてゐる紅葉
は自分にとつてはむしろ非常に珍しいものである。

たぶん自分の中学時代、それもよほど後のほうかと思うころに、父が東京の友人に頼んで「大杯」という種類の楓の苗木をたくさんに取り寄せ、それを邸内あちこちに植えつけた。自分が高等学校入学とともに郷里を離れ、そうして夏休みに帰省して見るたびに、目立つてそれが大きくなっているのであつた。しかし肝心のもみじ時にはいつでも国にいないので、ついぞ一度もその霜に飽きた盛りの色を見る機会はなかつたのである。大学の二年から三年にあがつた夏休みの帰省中に病を得て一年間休学したが、その期間にもずっと須崎^{すさき}の浜へ転地していたために紅葉の盛りは見そくなつた。冬初めに偶然ちよつと帰宅したときに、もうほとんど散つてしまつたあとに、わずかに散り残つて暗紅色に縮み上がる

つた紅葉が、庭の木立ちを点綴^{てんてつ}しているのを見て、それでもやつぱり美しいと思つたことがあつた。それつきり、ついぞ一度も自分の庭の紅葉というものを見たことがなかつたのである。それをかれこれ三十年後の今日思いもかけぬ東京の上野^{うえの}の美術館の壁面にかかつた額縁の中に見いだしたわけである。

生まれる前に別れたわが子に三十年後にはじめてめぐり会つた人があつたとしたら、どんな心持ちはするものか、それは想像はできないが、それといくらか似たものではないかと思われるような不思議な気持ちをいだいてこの絵の前に立ち尽くすのであつた。

次男が生まれて四十日目に西洋へ留学に出かけ、二年半の後に帰省したときのことである。船が桟橋^{さんばし}へ着いたら家族や親類が

おおぜい迎えに来て いた。姉が見知らぬ子供をおぶつて いるから、これはだれかと聞いたらみんなが笑いだした。それが紛れもない自分の子供であつたのである。それがそうだと聞かされると同時に三年前 の赤ん坊の顔と東京の原町の生活が実に電光のようにな 脳裏にひらめいたのであつた。

この絵に対する今の自分の心持ちがやはりいくらかこれに似て いる。はじめ見た瞬間にはアイデンチファイすることができなかつた昔のわが家の庭が次第次第に、狂つていたレンズの焦点の合 つてくるように歴然と眼前に出現してくるのである。

このただ一枚の飛び石の面にだけでも、ほとんど数え切れな 喜怒哀楽さまざまの追憶の場面を映し出すことができる。夏休み

に帰省している間は毎晩のように座敷の縁側に腰をかけて、蒸し暑い夕なぎの夜の茂みから襲つてくる蚊を団扇で追いながら、両親を相手にいろいろの話をした。そのときにいつも目の前の前の夕やみの庭のまん中に薄白く見えていたのがこの長方形の花崗岩の飛び石であつた。

ことにありあり思い出されるのは同じ縁側に黙つて腰をかけていた、当時はまだうら若い浴衣姿ゆかたすがたの、今はとくの昔になき妻の事どもである。

飛び石のそばに突兀とっこつとしてそびえた楠くすの木のこずえに雨氣を帯びた大きな星が一ついつもいつもかかっていたような気がするが、それも全くもう夢のような記憶である。そのころのそうした

記憶と切つても切れないように結びついているわが父も母も妻も下女も下男も、みんなもう、一人もこの世には残つていないのである。

国展の会場をざつとひと回りして帰りに、もう一ぺんこの「秋庭」の絵の前に立つて「若き日の追憶」に暇いとまご請いをした。会場を出るとさわやかな初夏の風が上野うえのの森の若葉を渡つて、今さらのように生きていることの喜びをしみじみと人の胸に吹き込むようと思われた。去年の若葉がことしの若葉によみがえるようにな人の人間の過去はその人の追憶の中にはいつまでも昔のままによみがえつて來るのである。しかし自分が死ねば自分の過去も死ぬと同時に全世界の若葉も紅葉も、もう自分には帰つて来ない。そ

れでもまだしばらくの間は生き残った肉親の人々の追憶の中にかすかな残像^{ナハビルト}のようになつて明滅するかもしれない。死んだ自分が人の心の追憶の中によみがえらせたいという欲望がなくなれば世界じゅうの芸術は半分以上なくなるかもしだれない。自分にしても恥さらしの隨筆などは書かないかもしだれない。

こんなよしなしごとを考えながら、ぶらぶらと山下^{やまました}のほうへおりて行くのであつた。

(昭和九年六月、心境)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第四卷」 小宮豊隆編、岩波文庫、岩波
書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

庭の追憶

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>